

携帯電話(ケータイ)利用の観点からみた現代家族の内的構成に関する研究

天笠 邦一

kz@sfc.keio.ac.jp

慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス 政策・メディア研究科/ケータイラボラトリ

* 本文要旨 *

ケータイの日常生活への浸潤は、より日常的なシーン/特別でない人々のケータイ利用に関する研究の重要性を増加させた。これを鑑み、本研究では、最も日常的で特別でない関係性である「家族」内のケータイ利用に焦点を当てることとした。

研究の前提として、家族は様々な社会要素から影響を受け、その形を変える社会的構成物であるとする。その上で、ケータイの影響力が最も強い家族の「内的」構成を、ミクロな社会構造を描き出すのに適したエスノグラフィックな手法を用い明らかにした。

結果、家族(特に親子)間の情緒的繋がりが、近代的な場所・専門性による断絶を超えケータイにより強化される傾向が明らかとなった。また、家庭内に存在していた物理的境界が、ケータイが作り出す情報空間の影響により、動的にその意味を書き換えられる現象も観察された。人々は、ケータイを通して激しく移り変わる家族関係をマネージし、その構築・維持・発展を図っている。

キーワード：家族/家庭、携帯電話(ケータイ)、社会構成主義、エスノグラフィ、メディア

Inner Constructions of Today's Family from the Viewpoint of Keitai Use

AMAGASA, Kunikazu

kz@sfc.keio.ac.jp

Keio University, Shonan Fujisawa Campus/Keitai Laboratory

Abstract

In Japan, mobile phones, keitai, have finished the popularization phase and are playing important role as a social infrastructure in our ordinary life. So it is important to research such ordinary uses of keitai. However, there is little research on them.

From the point of view, this paper illustrates the practices of keitai uses in families, which are one of the most ordinary social groups, and explains the change of families' inner constructions through ethnographic methods such as detailed interviews.

In particular, keitai has made emotional connections among family members stronger beyond the modern division of places and domains and changes the meaning of the physical boundary of home spaces dynamically. People are using keitai strategically in order to construct, maintain and develop the family relationships.

Keyword: Family/Home, Mobile Phone(Keitai), Social Construction, Ethnography, Media

1. はじめに

携帯電話(以下ケータイ)は、普及期を終え、日常的社会的インフラとしての機能を果たしつつある。その契約数は約8,700万契約¹に及び、日本の全人口²の約2/3とほぼ等しい。普及率でも社会的にアクティブと考えられる13~59歳全ての年代で60%を上回る³。

一方で、「家族」は、我々にとって通常最も日常的な社会集団である。故に日常的メディアとなったケータイは、家族の私的で親密な空間の中に深く入り込み重要な役割を果たしていると考えられる。しかし先行研究では、ケータイは大人の理解を超えた若者のような特別な人々が使う新しく特殊なものとの認識が強く家族の様な日常的領域が扱われることは少なかった。

以上の問題意識から、本論は日常的領域である家族・家庭においてケータイが具体的にどのように使用され家族関係や家庭空間を再編成しているのかを明らかにすることとする。

2. 概念的枠組

2.1. 社会的構成物としての家族

本論では、家族とは多くの社会的要素と相互関係にある社会的構成物であるとする。

日常生活において家族の存在は、多くの人にとって「当たり前」のものであり、その価値は疑い難い。故にその形や機能を普遍的なものとして捉えがちだが、多くの先行研究が示すように、その機能・形は、経済や産業、法律などの社会状況により変化する。(Stone, 1977)ⁱ

国家や産業は、近代化の実現のためその可変性を利用し、規範としての「家族」を作り上げてきた。例えば、「郊外」の中に夢見られてきた家族は、大量生産・大量消費の消費社会を支え、(Harvey, 1985)ⁱⁱ法の中に制度として組み込まれた家族は近代国家を実現した。(上野, 1994)ⁱⁱⁱ

しかし、社会の成熟・多様化(財務省, 2004)^{iv}は、上記の近代的家族規範をも破壊しつつある。現場レベルの家族の関係性/あり方の変化が規範自体に変化を迫っているのである。

2.2. 社会的メディアによって再構成される家庭空間

人々は常に空間の物理的構造を理解し利用して行動する。故に家庭の物理的構造は、家族の権力関係を可視化/再生産するツール(Spain, 1992)^vでもあり家族の内的構成を理解する上で重要である。しかし、家庭空間において家族内の権力関係を表象するのは物理的構造だけではない。メディアもそれに重要な役割を果たす。テレビの受容(Morley, 1986)^{vi}や電話の受容(吉見他, 1992)^{vii}が良い例だが、メディアはその「飼いならし⁴」(Silverstone, 1992)^{ix}の過程で、家族内の権力関係の可視化・再生産のやり方に大きな影響を与える。家族はそれぞれ、そのような変化を柔軟に取り入れながら、家庭空間内の権力の可視化装置としてのメディアを戦略的に利用しているのである。(土橋, 2002)^{viii}新たなメディアの登場は、家庭空間を再構成する。

2.3. ケータイを介したコミュニケーションの特徴

Ling/Yttri(2002)^xは、ケータイを介したコミュニケーションの特徴を説明するため「ハイパーコーディネーション」「マイクロコーディネーション」の2つの概念を提唱した。この概念は、元来ノルウェーの若者達の実践を説明する為のものだが、今回Ito, Okabe(2005)^{xi}の指摘のようにケータイの普及した世界の多くの地域でこの概念は適用可能と考える。

「マイクロコーディネーション」は、大人の利用を中心とする、待ち合わせやミーティングの調整など、利便性を追及したケータイの道具的利用に対応する概念であり、「ハイパーコーディネーション」は、若者たちの利用を中心とする、絶え間ないメールのやり取りなどケータイの表出的利用に対応する概念である。若者たちはこれを通じて関係性を常に同定し続ける。

人々はある状況に参加するためには、状況を理解し、その状況に自らを適応させる形で、振舞い続けなければならない。(Goffman, 1967)^{xii}二層性を持つケータイが介在した状況に参加する際もそれは同様であり、その二層性を理解/活用しながら人々は状況に参加するはずである。

以上を踏まえ、本論ではまず、その二層性を前提とした上での、ケータイによる家族の現場レベルでの変化、引いてはそれを生み出す人々の日常的実践・内的構成を明らかにする。さらに、その内的構成を生み出す重要な要素である家庭空間が、ケータイの「飼いならし」の過程、すなわち日常における実践によりどのような影響を受けているのか明らかとしたい。

3. 調査枠組

ここでの分析・考察は、天笠ら(2004)^{xiii}が行ったエスノグラフィックなインタビューに基づく。インタビューに際しては、観察可能性と相互理解を深めるために、調査協力者に家族関係図・家の間取り図を描いてもらった。なお被験者を、中高生とその母親中心としたのは、初期の研究としては、ケータイの利用頻度が高く傾向が見えやすい方が適していると考えたからである。(家族関係図・家の間取り図のサンプルは図1、調査の詳細に関しては資料1参照)

4. 調査結果と考察

4.1. アイデンティティ戦略としての家族内ケータイ利用

主に母親から毎日定時に「今どこ?」「夕食はいるの?」と子供にメールする習慣が、ほぼ全ての調査協力者に見られた。これを「今どこメール」と呼ぶことにする。前述のLing & Yttriによれば、思春期の若者は独立心が強く、親からの束縛は拒絶する傾向にあるが、この「今どこメール」は明らかな親からの束縛であるにも関わらず、多くの場合驚くほど素直に子供たちはこのプラクティスを許容していた。なぜこのような一見矛盾する現象が起こるのか。

「今どこメール」は、異なる願望を持つ親子の双方を満足させる「最適解」であると考えられる。親は、社会的規範やアイデンティティ確保のため、出来る限り、離れていても子供を管理・束縛し、親子間の権力関係を可視化したい。一方で、子供は、社会的に求められる独立心より親の子供との関係維持の為の明らかな努力は拒絶せざるを得ない。だが、成熟・多様化した不確定要素の多いハイリスク社会における、アイデンティティ確保先としての家族は確保しておきたいため、ただ束縛を拒否することも出来ない。習慣化した「今どこメール」が実現する「マイクロコーディネーション」を装った「ハイパーコーディネーション」は、これら2つの要望を可能な限り同時に満たすことを可能にするのだ。そして、親子は、それぞれどこにいても、努力なしでは保つことの出来なくなった⁵その感情的な連帯を保つことに成功している。

そのような親子間の感情的繋がりは、子供の危機の際に当初想定されたアイデンティティの保険としての役割を果たす。(資料2参照)近代的な分断(Giddens, 1990)^{xiv}を超え、ケータイは、家族の間に感情的な依存関係を作り出すことを可能にする。

4.2. ケータイによって再構成される家庭空間内の動的境界

Goffman(1963)^{xv}の「コミュニケーションの境界」に対する理解⁶や吉見他(1992)^{vii}の、固定電話の置き場所の変遷に対する理解⁷の様に、家庭空間の意味を固定的に捉えることは、ケータイの時代には、うまく当てはまらない。(資料3参照)資料3において調査協力者の母親は、プライベートなケータイを敢えて自分の娘に開放し利用させることで、物理的な境界と社会規範を乗り越え、両親の寝室に娘を招き入れた。このケースでは、ケータイの情報というバーチャルな所有/非所有の関係が、物理的境界の意味を再定義している。

資料4では、調査協力者の父親は、固定的にテレビの視聴を通して権力を可視化していた。しかし不倫の暴露で家庭内での面目を失うと、更なる危機を避ける(avoid)ためケータイや自分自身を用いて動的に空間を編集し、Face-work(Goffman, 1967)^{xii}を行い自らへの接触を統制したのである。更にこの調査協力者は、自らのケータイにパスワードをかけ接触を制限する一方、家族のケータイはすべてを覗き見ていた。このケースではケータイ上の仮想的な情報に対する接触可能性が、そのまま家の各自の部屋すなわち物理的環境に対する接触可能性となっている。

5. 結論

成熟・多様化社会の中でリスクが増した他の社会集団に比べ、アイデンティティ確保先として「家族」は先天的優位性を持つ。ケータイの超場所的性質がその優位性を助長し、家族内の情緒的繋がりを強化する。結果、家族はより「普遍的に見える」ものとしてたち現れるが、これは全ての情緒的・感情的繋がりが、家族に収斂する「家族の時代」の可能性を示唆するものである。しかし今回ケースとしては少ないが、不倫をした父の例のように、ケータイは家族の断絶をも可視化するツールでもある。ケータイによる仮想的レイヤーと、物理的レイヤーの2つが相互に作用しあいその意味が流動的となった家庭空間など、より豊かで複雑となりつつあるコミュニケーション環境での、絶え間ない努力を通じて、家族はその発展もしくは分断を図っている。

以上

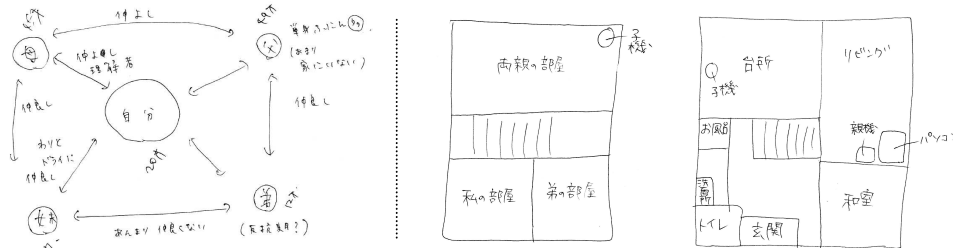
* 注記

1. TCA(電気通信事業者協会: www.tca.or.jp)が 2005 年 4 月 7 日に発表した内容によれば、2005 年 3 月末現在で、日本国内の携帯電話の契約数は 8699 万 7600 契約。
2. 総務省統計局(www.stat.go.jp)によれば、日本の人口(推計)は平成 16 年 12 月 1 日現在で 127,734 千人。
3. 総務省「通信動向調査 2003」(www.soumu.go.jp/s-news/2004/040414_1.html)調べ。
4. R. Silverston らは、「飼い慣らす(domestication)」という単語を、家族がメディアを受容していく過程を表現する言葉として用いている。
5. 松田は、その論文“Mobile Communication and Selective Society”(2005)の中で加藤が伝統的な村落である奈良県二階堂村で行った 3 世代家族に対する参与観察のデータ(加藤秀俊, 1958, 『ある家族のコミュニケーション生活』)と、高度経済成長以後の家族は、個人化の文脈の中に位置づけることが出来るとする目黒の議論(目黒依子, 1987, 『個人化する家族』けいそう書房)を援用し以前はその維持に何の努力も必要としなかった家族は各メンバーの絶え間ないコミュニケーションと努力によりはじめて維持されるものとなったとし、家族間のケータイによる絶え間ないやり取りは、この文脈の中に捉えられる現象であるとした。
6. Goffman は、その著書“Behavior in Public Place”(1963, Free Press)の中で「コミュニケーションの境界」について、以下の様に述べている。(以下引用)
Social arrangements are therefore recognized that restrict such communication to a special part of the boundary, such as doors, and that lead persons inside and outside the region to act as if the barrier had cut off more communication than it does. (pp151-152)
7. 吉見らは、『メディアとしての電話』(1992, 弘文堂)の中で、固定電話の置き場所の変遷について触れ、電話が地域の共有物であったころは、地域との縁側として機能する玄関に、家族の共有物であったころは、家庭の共有スペースであるリビングに、電話がコードレス化によって個人の物となると個人の部屋に、のように場所の意味を固定としその変遷を説明した。

* 参考文献

- i. Stone, L., 1977, “The Family, Sex and Married in England, 1500-1800”, Weidenseld & N
- ii. Harvey, D., 1985, “Consciousness and the Urban Experience: Studies in the History and Theory of Capitalist Urbanization”, Blackwell
- iii. 上野千鶴子, 1994, 「近代家族の成立と終焉」 第 2 章, 岩波書店
- iv. 財務省税制調査会, 2004, 「答申: わが国の経済社会の構造変化の実像について」
<http://www.mof.go.jp/singikai/zeicho/tosin/160622.htm>
- v. Spain, D., 1992, “Gendered Space”, Univ of North Carolina Pr.
- vi. Morrley, D., 1986, “Family Television –Cultural Power and Domestic Leisure”, Comedia/Routledge
- vii. 吉見俊哉他, 1992, 「メディアとしての電話」, 弘文堂
- viii. 土橋臣吾, 2002, 「情報エコロジーとしての家庭空間」, 武蔵工業大学メディアセンタージャーナル 2002 年第 3 号
- ix. Silverstone 他, 1992, “Information and Communication Technologies and the Moral Economy of the Household” in ‘Consuming Technologies: Media and Information in Domestic Spaces’, Roger Silverstone et. al. (edt)
- x. Ling, L. & Yttri, B., 2002, “Hyper-Coordination via mobile phones in Norway”, in ‘Perpetual Contact’ Katz, J., & Aahus, M. (edt), Cambridge University Press
- xi. Mizuko, I. Etc. 2004, “Intimate Connections: Contextualizing Japanese Youth and Mobile Messaging” <http://www.itofisher.com/mito/archives/itookabe.texting.pdf>
- xii. Goffman, E., 1967, “Interaction Ritual –Essays on Face-to-Face Behavior”
- xiii. 天笠邦一他, 『携帯電話の家族内利用に関する研究』 2004,
- xiv. Anthony Giddens, 1990, “The Consequences of Modernity”, Cambridge University Press
- xv. Erving Goffman, 1963 “Behavior in Public Places”, The Free Press

図1：インフォーマントに描画を依頼した家族関係図・家の間取り図のサンプル



資料1：インタビュー調査の詳細

- ・調査手法： 個別具体性を重視した聞き取り調査 (1時間半/回)
- ・調査期間： 2004年6月～2005年2月
- ・調査人数： 21人 (男性9名, 女性12名)
- ・調査協力者の居住地： 横浜を中心とした郊外地区
- ・調査協力者内訳： 中学生1名(男性1名)/高校生11名(男性6名, 女性5名)/大学生3名(内男性1名, 女性2名)/既婚社会人5名(内女性5名)/未婚社会人1名(内男性1名)

資料2：女性M, 54歳, 藤沢市在住, 「17歳の娘とのケータイでのやりとりについて」

M: あのアルバイトなんかして、結局Rが一番下で、大学生ばかりの所で働いていたんですね。で、結局話も合わないし、で、自分ひとりでぼつとしてると話に入ってこなくて感じ悪いみたいなことを言われたり突つかれるんですよ。そういうときにメールが来るんですね。今すごい落ち込んでるっていうような感じで。あっ、大丈夫?あんまり気にしないでね。っていうようなメールを入れたりであるとか。あの自分ばかり責めちゃだめよってメールを入れたりするんですけどね。

天笠: ああ、それは勤務中とかでも、ちょっと手が空くと?

M: あっ、トイレ行ってきます。とかいってちょっとつらいなって言うときにいってくるんですね。ホントに心配はするんですけど。

資料3：女性I, 17歳, 藤沢市在住, 「母親のケータイについて」

天笠: お母さんのケータイって何処においてあるの?

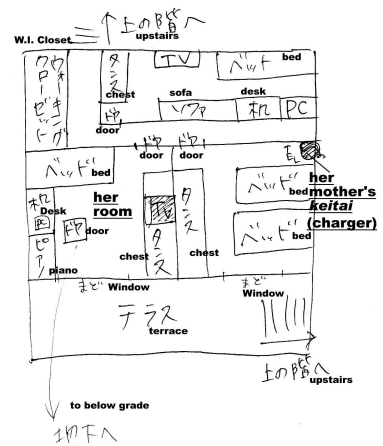
I: お母さんのケータイは、ここ(両親の寝室の一角を指し)が棚なんですけど、そこに親機と一緒に置いてあります。

天笠: なるほど、さっきお母さんのケータイになったら出ちゃうみたいな話をしていたけど、ここ(Tの部屋を指し)いると鳴ったなあと思って、取りに行ったら返しちゃう感じ?イメージ的には。

I: そうですね。お母さんが気付かないんですよ。いつも。で充電器がここにあるので、そこから取って使って上にいってこから(リビングの机の上)辺に置きちゃうんですよ。そこからは机の上、みたいな感じで。

天笠: あっ、じゃあ、前もって又返してないんじゃないかなあとか思って、入ってみちゃうってことは?

I: ああ、余り鳴らないんですけど、お姉ちゃんから連絡があるんで、たまに見に行ったら自分のケータイみたいに2個ポケットに入れておく。



調査協力者Iが書いた家の間取り図

資料4：女性N, 17歳, 横浜市在住, 「父親のメディア利用について」

天笠: 一番リビングのこのテレビを見るのは誰かな?

N: えー。父。あっ、でも前、偉そうなときはそうだったけど、今は立場が無いから、自分の部屋にさっさと入っちゃって出てこない。

天笠: なるほどね。じゃあお父さんなだけけど、お父さんのケータイってどこにおいてある?

N: 父のベットがここにあってここが母のベットなんですけど父のベットの上においてある。

天笠: お父さんのケータイがなっているのとかって見たことある?

N: 無いけど。でも見たりします

天笠: で、感想は...

N: 前は、相手から来ていたけど、今はいやだから見ていないです。